

イタクラマツ―言霊

言霊、つまり言葉に魂があるという考え方は古来から日本にもあります。万葉集や平安時代の和歌には呪術



佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モンレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。北海道大学大学院農学院農学専攻博士後期課程修了。全国通訳案内士。

昔のアイヌの人々は、神に願いや抗議を伝えるためイタクラマツを巧みに使いこなしていたといわれます。アイヌの子ど

もたちは、大人が物語を語るのを自然に聞きおぼえて、その奥ゆきや幅の広さ、節回し、起承転結などを学び、まねして人に聞かせたりしていたそうです。その過程で言語能力が磨かれ、今風にいうとプレゼンテーションの力が育まれたというわけです。子どもたちは、物語を語るときにしか使われない^{みやび}雅な表現、聴衆が納得したり心を動かす表現や美しい言葉も実践をとおして自然に身につけていきました。

また、身内に災難や不幸があったりすると、人間の不注意もあるかもしれないが、神の守りが不十分だったということで、神様にも強く抗議して責任を問います。こういうところは「長いものには巻かれろ」とか「臭いものにはふた」というふうに、問題があっても曖昧にしようとする日本の発想とは全く異なっています。むしろ、より具体的な表現を好む、狩猟民族が主流の欧米的言語表現との共通点を感じます。日本人も縄文時代は狩猟民族だったはずですが、集団で作業する必要がある稲作が普及し、全体としてのまとまりを優先した結果、個人の主張というものをしなくなってきたのかもしれない。

アイヌ式裁判のチャランケでも弁護人がどれだけ言葉を駆使して説得力のある弁論ができるか、が勝敗を決める重要な要因でした。

テレビもゲームもない時代、ユーカラ（英雄の物語）は人々にとって大切な娯楽であり、明かりといえど^い囲炉裏の炎だけの暗がり、大人たちと一緒に、心躍る話に耳を傾けながら神々や英雄の活躍を想像するのは、子どもたちにとって楽しい時間であったに違いありません。

藤村先生のところでユーカラの勉強をさせていただいていたとき、テキストのなかに「部屋に飾られている刀の金具がキラキラと光り」という表現がありました。何故キラキラと光るのかについて、先生が囲炉裏の炎の揺らめきが反射して光るのだとご説明くださったことがあります。かつてその物語を聞いていた人々が、ユーカラで語られる刀の^{きら}煌めきをイメージしながら楽しんでいた豊かな時間は、スイッチひとつで明かりがつく私たちの生活では味わうことができない経験だと思われます。プレゼンテーション能力についても、日本はまだまだ世界に後れをとっています。物語を聞くことにより、子どものころから言語能力に磨きをかけるといふアイヌ方式は、参考とすべきところが大きいのではないのでしょうか。

.....

*本稿は、元北日本文化研究所代表であった藤村久和先生を講師として（一社）北海道開発技術センターが自主事業として実施してきたアイヌ文化勉強会の内容を、筆者が取りまとめたものを、藤村先生に長年師事されていた花輪陽平氏に校閲いただいたものです。

藤村 久和 氏（1940-2025）元北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般（精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療（整体ほか）等）を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践してきた。主な著書：『アイヌの魂の世界』（小学館、1982年）、『アイヌ、神々と生きる人々』（福武書店、1985年）、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛氏との共編、小学館、1990年）、『アイヌのごはん』（監修、デーリマン社、2019年）、『平成20～令和6年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1～16』（北海道教育委員会、2008～2025年）等。